

女子部高等科1年 読書 「教育三十年からの学び」

Aクラス担当 小谷野温子

羽仁もと子著作集第18巻『教育三十年』は、自由学園の教育理念と実践の記録である。それは「思想しつつ生活しつつ祈りつつ」「真の自由人」を目指して共に学ぶ姿である。高等科1年生はA,Bクラス共、それぞれ『教育三十年』を学んでいる。Aクラスは「それ自身1つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」を報告する。81年前仏国ニースにおける第6回世界新教育会議での羽仁もと子先生の講演の全文である。後に羽仁吉一先生が「自由学園の教育憲法」と位置づけられている。

この精神に基づく生活基盤が現在も独自の道標として私達の生活に根ざしている。伝統を継承しつつ創造的な生活を選ぶ責任がある。現在学んでいることの意義を生徒が客観的に見つめることができるよう願っている。

I. はじめに

自由学園の特色ある授業の一つに「読書」がある。中・高等科全学年が別表のテキストで学んでいる。1921年の創立以来変わることなく、創立者の建学の精神に基づく教育理念を、常に確認し実践していくためである。「読書」が新鮮な志を培い養う学びのときとなるように励んでいる。以下の表は2013年度授業予定である。

学年	書籍名	著者
中等科1年	子供読本 イワンのばか	羽仁もと子 トルストイ
中等科2年	自由・協力・愛 若き姉妹に寄す	羽仁もと子 羽仁もと子
中等科3年	みどりごの心 友への手紙 啓発録 雑司が谷短信	羽仁もと子 羽仁もと子 橋本左内 羽仁吉一
高等科1A	教育三十年 後世への最大遺物	羽仁もと子 内村鑑三
高等科1B	子供読本 自由・協力・愛 教育三十年	羽仁もと子 羽仁もと子 羽仁もと子
高等科2年	自由人をつくる 人間篇	羽仁吉一 もと子 羽仁もと子
高等科3年	自由学園の教育 みどりごの心 教育三十年 南沢だより	羽仁恵子 羽仁もと子 羽仁もと子 羽仁恵子

学業報告会で「読書」を報告することが決定し、クラスに伝えたのが10月後半であったので、すでに学び終わった内容をさらに深めて纏めることとなった。

4月の最初の授業で、自由学園の成り立ちや、建学の精神について皆からの確認や疑問を語りあった。質問も出た。羽仁もと子先生とはどういう方なのか、その業績や評価を知りたい。中に「外国で、羽仁先生はどのような講演をされたのですか？」等。私は1932年ニースでの講演の全文が『教育三十年』に収録されていると話したので、「それを読みたい。」ということになった。

こうして「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」を学び始め、10月5日に読了した。

今年度の「読書」の授業の内容を振り返ると、比較的生徒との交わりを深めながら歩むことができた。

II. 報告会までの学習

- (1) 特別勉強（羽仁もと子先生の足跡を学ぶ）
 - ① 高橋和也副学園長（2013年10月26日）
中国の北京生活学校開校 75周年の記念の会に出席された感想をA,Bクラス合同で

伺った。「1938年から7年間続いた北京生活学校が、閉校された後も激動の時代を超えて、まかれたタネが発展している。愛に基づく教育は永遠に続いていく。教育こそが新社会をつくる力だ。」と実感を込めて話して下さり、羽仁先生の人類愛と、豊かな構想力を高橋先生の熱のこもったお話しからさらに学ぶことができた。

②村上民先生（2013年11月14日）

資料室内で大切に保存されてきたニースの講演に関する記念の品を見せて頂いた。1932年の旅に使われた実物の品々、ビデオや写真類を具体的に手に取って、船の旅や学園あげての送迎の様子などを実感した。

とりわけ、この講演の意義やその当時の世界情勢や日本の教育の実態などに触れ、羽仁先生の使命の旅の様子は、皆に印象深く響いた。

(2) ニースの講演は、14章からなる重い内容によって論理が構築されてゆく。最後まで主体的に取り組めるように、学んだ内容を継続的に理解できるように工夫した。まず生徒に毎時間の終了時に、読んだ内容の要約を書いて提出してもらい、評価と添削をして毎回返却した。要点を捉えて自分の言葉で簡略に書いた人の文を紹介して、学び合うことは楽しかった。これによってポイントを発見し、捉えて表現する集中力を養う訓練になっていた。

生徒がまとめた講演文の要旨

- 1章 会議の主題と演題
- 2章 教育者はヴィジョンを堅持して、それを規定せず、自主的に生徒に考えさせる。
- 3章 子供の願いに着目して共に実現する。
- 4章 文部省令によらず、人類社会の自然な姿によって存在する学校
- 5章 子供と共に考えて家族をつくり自主的な学校経営を活発にする。
- 6章 「自分のことは自分達でしたい」を生かすことが自主独立の人格の土

台となり、厳しい課業が父母達の心配ともなる。

- 7章 健康、協力、人間力、失敗からの進歩、等人間建造の基礎を捉え、父母の心配は自然に解消する。
- 8章 団体と個人が、共に向上し得ることに、関東大震災の救援活動の実践から自信を持つ。
- 9章 経済の学びは自治の運営として学校の経済を知ることから父母が応分の負担を提案して協会の誕生に至る。
- 10章 卒業生の志を活かして、さまざまな働き場の拠点を作った。製品を生産し社会へ働きかけていく。
- 11章 生徒との懇談から礼拝を望む声が出た。詰め込みでない宗教心が人間教育には大切である。
- 12章 宗教心の健全な発達で心が燃える。
- 13章 宗教は、宗教的な生活の場で自然に学ぶ
- 14章 全能者の導きのもとに神の国の大家族をつくる。そこに人間同士の自由がある。

(3) **感想文を書く(以下の1~3に触れる)**

1. 羽仁もと子先生のお思想
 2. 自由学園の教育理念
 3. 自分自身の考え
- 1、2、3をふまえて全員の感想文を組中で共有した。この感想と講演の要旨のまとめを合わせて報告内容とすることに決まる。

III. 報告会への準備

三つの柱

1. 深く学ぶ機会とする (学ぶ)
2. 学びをしっかりと伝える (伝える)
3. 皆で協力して創り上げる (協力)

以上クラスで励む3つの柱を決める。



・報告の項目とクラスの体制

リーダー 増田彩花
副リーダー 小野沢和美

◎は小グループリーダー

報告の項目	担当メンバー
旅の目的と旅程	◎高橋ひかり 安藤寛子 榎本桃子 久保あさひ 桜井彩乃 手塚真生
講演文の要約	◎野中香菜恵 浦田由希子 太田晶子 古屋絢子 松原美貴
当時の生活の検証	◎牟田 静 伊藤香菜子 森山月子 栗田萌々子 高木小羊子
現在との比較と対策	◎長島野枝 大前笑くぼ 加賀冬芽 小池明生 小垣外裕子 須山琴美 手塚天音 三上莉央 森田 陽
私たちの目指すもの	◎吉良道子 阿部 歩 大木芽衣 下竹 風 荘加真希

IV. 報告会までの日程

日程	内容
10月21日	家族替え、新しい家族メンバーで報告グループを構成する。
10月24日	家族で報告内容を考える。
10月29日	原案を総合してテーマを決める。「講演」と「現状との比較」にする。

11月2～18日	小グループに組分け。小グループリーダーを中心に進めていく。
11月19日	報告の表のひな形づくり
11月25日～	報告文、表の内容の確定。マイク、出入り、並び方の練習。
11月27日	表を書き上げる。報告文提出終了。リーダーの確認で訂正が多数発覚
11月28日	午前中、報告文の修正。全員の報告とし、担当を分担して聞き合う。午後総練習。伝える力を磨くための努力
11月29日	報告内容に連続性があるように
11月30日	学業報告会

V. 報告の内容

(1)挨拶

(2)旅の目的と旅程

羽仁もと子先生は世界の教育視察を希望されていた。おりしも仏国ニースで開催される第8回世界新教育会議での講演の依頼を受け念願の旅が実現した。

(3)講演文の要約

(4)当時の学園生活 礼拝・自治・懇談

(5)講演文を学んだ感想

①現在は配慮から職員の方々の管理が増し、学びの機会が失われているのか？

②生徒を含めた全員に、目標とするビジョンや生活改善の意識が希薄になっているように感じる。

表面的な変化はあっても自由学園の根幹は継承されている。



(6)現在の生活から比較して考える

①良い仕組みでも慣れてしまうと意欲が低下

して形式的になっている。

- ②生徒の自発的な希望で始まった礼拝だったが意識が受身的になっている。
- ③礼拝に対する意識について。大きな存在を感じる切っ掛けになるように。
- ④「わからないことは、わからないままでよい」と創立者が言われたことを知り、生活の中で分かっていくのだ。
- ⑤毎日礼拝を重ねていく中で、未知のものを発見しよう吸収しようという気持ちをもって礼拝に臨みたい。

(7) 私たちのめざすもの

- ①自由学園の教育理念を確認する。
- ②「生活即教育」この理念を実行する為には、個人と団体が共に向上していくこと。これはあり得ること。
- ③自分の社会に喜んで力を出す生活。これが生活即教育で、私達の目標。
- ④社会では偏差値が重要視されがちですが、私達は24時間全体が学びとなることを忘れずに「生活即教育」の理念を大切にしていきたい。



(8) まとめ(リーダーの言葉)

沢山の人が連携して大きな表をつくっていく時に、全体の取り組みが揃ってきました。この講演を多角的にまとめることは良い学びでした。今の自分達を客観的にみる機会になりました。改善すべき点が自覚でき、懇談で話し合っていきたいです。高等科1年A,Bが一つのクラスとして向上し、共に使命を果たしていきたいと思います。

VI. 報告会を終えて

当日は昼食のお料理を担当する大きな勉強があり、朝からその責任を果たして、記念講堂に急ぎ足で集合した。

平素のお習字の学びを発揮して、真剣勝負とばかりに下書きもせずに一気に書き上げた迫力のある表がステージを見守っている。自分たちで創った報告文を力をこめて発表した。大きな紙に毛筆で書いた表がその言葉を支えていた。

ニースの講演は自由学園の教育憲法と位置づけられたものである。生徒が報告をつくりあげる過程では、自分たちの無気力な生活の改善の必要に迫り込まれ、クラス中で苦慮するときを与えられた。「なぜ礼拝や自治や懇談があるのか」、「積み重ねてきた現状の不平や不満を報告するのか」、「不自由を超えた自由とは何か」等々。

憲法と現状のギャップが明確になったとき、どうしたら復活できるか目指すものを求めた。

結論は「生活即教育」となった。これが自由学園の教育理念だと生徒たちが納得できた。「毎日の生活から自発的に学んでいきたい」、「未知のものを追求め独立した人格を養いたい」、「レベルの高い協力がこの社会を創っていくのだ」とひとりひとりが実感した。報告文は全面的に生徒の主導で考えられ、それを再度リーダーによって検討され発表を行った。



VII. 終わりに

高等科1年生は天真爛漫で豊かな個性を持ったクラスである。読書は地味で奥深い学びであるから、クラスの力を結集することができるか問われていた。しかし自分達を客観的に見る度に賢い発見と自覚が生まれたことを嬉しく思う。

担任の星住、神沢、吉田先生、Bクラスの指導にあられた竹上先生、創立者の時代を話して下さった市岡理事長をはじめ多くの方々に深く感謝を申し上げる。

VIII. 参考文献

- ① 羽仁もと子 羽仁もと子著作集第18巻『教育三十年』1950年 婦人之友社
- ② 羽仁もと子 羽仁もと子第14巻『半生を語る』1928年 婦人之友社
- ③ 羽仁もと子 羽仁もと子第19巻『友への手紙』1955年 婦人之友社
- ④ 羽仁吉一『雑司が谷短信上・下』1956年 婦人之友社
- ⑤ 羽仁吉一、もと子『自由人をつくる』1991年 自由学園出版局
- ⑥ 『学園新聞』自由学園出版局
- ⑦ 『自由学園の歴史Ⅰ、Ⅱ』自 1985年、1991年由学園女子部卒業生会編集発行